

「部屋しかないところからラボを建てる」と銘打ったこのスタディは、それぞれに関心を持った人たちが集い、「リサーチ」をするためのラボチームの立ち上げを試みるようになっていた。最初の時点で発表されたスタディの概要文では、メンバーが行うことを「一斉に調べ、徹底的に共有し、可視化する」という三段階に想定しており、ナビゲーターメッセージには、「そうすることで、調べた情報たちが交差し、繋がり、あわよくば『東京』もしくは、同時代に変容する社会の像の片鱗が見えてくるかもしれません」とある。また、そこでなされるリサーチでは「ひとの話を聞く」という手法に重点を置き、本や資料をあたることよりも直接的な対象とのやりとりを行なってほしい、としている。さて、半年ほどの活動が終わったいま、改めて私たちが行なってきたことを振り返り、言葉にする時が来たというので、書いてみる。

まず、予想をはるかに上回ってできなかったこと、は、「ひとの話を聞く」ということである。何を隠そう、このラボの芯になるはずの営みがなかなか動き出さなかった。誰かに話を聞こうとすれば、当たり前ながら、語ってくれる人が必要になる。主に東京で働き、暮らすメンバーらにとっては、その語り手に出会う筋道をつくるのがとても困難なように思われた。自分の関心だけを盾にして話を聞いていいの？、「聞いた話をどうするの？」と相手に問われた時になんと答えるのか。聞く、語るという行為の往復を通して、必要以上に親密になってしまったら、職業的な役割を介して、また個人や家庭という単位での自立的な生活を試みる都市空間の中では、聞くという行為にまつわる確認事項は無数にあり、複雑に交差ししているように感じられた。

丁寧にプロセスを踏み、相手との関係を尊重する傾向を持つメンバーらにとって、「ひとの話を聞く」時には、それらをクリアしていくための仕組みが必要であった。数回のラボ活動を重ね、もやもやと話し合いを続けた私たちは、「その仕組みこそがラボなのではないか」という結論に至る。そこで、私たちがまさに建てるようにしているラボを語り手に説明できるようにと、さっそく名前をつけることになった。「聞く」というキーワードから、耳のなかの蝸牛の形が連想されたことや、「かたつむり」や「むかう、リサーチする」というように「かたつむり」のなかに言葉遊びを含み込めるのも面白いのではないかとということで、「東京かたつむり」とした。

年末にその名前が決まって以来、メンバーたちはすこしずつ現場に出て、聞くという行為をはじめてみている。すこし踏み込んで日常とは違う役割りを得ることで、自らの予測とは違う、相手の言葉や聞くことの面白さや戸惑いに直面し、またラボに帰ってくる。

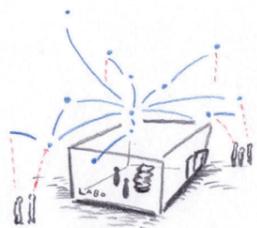
さて、「反対にできなかったこと」も記したい。私たちが、月に一度のラボ活動とその間に不定期で開かれてきたオープンラボデイでいったい何をしてきたかといえば、それは結果的に、メンバー同士や迎えたゲストとともに、とにかく長い、しかも密度があると自負するよう「おしゃべり」をすることだったのだと思う。おしゃべりだから、その場で特別な答えや新たな展望を見出すわけではない。互いの関心聞きあったり、ゲストの話を聞く場をつくりながら、その場を楽しみ、悩み、そして、いま東京で暮らすそれぞれが気になった言葉や、対話の中で結ばれた問題系を持ち帰っていく。すると、ラボで聞いた話や得た思考回路が、それぞれの日常をすこしだけ刺激してくれるようになる。私たちはラボでおしゃべりを重ねるその時間と、そこから得たこのようなささやかな変化（のちに「かたつむりな耳を持つ」と表現するようになった）を、共通して、価値のあるものと捉えるようになっていった。ふと見渡せば、オチも答えも、ともすれば正否もないおしゃべりを延々と続けることのできる場合は、日常の中では意外と少ない。出自も職業も関心も異なる人たちがわざわざ月に一度以上集まること自体に価値を見出しあえる、という共通点を持つこと自体が、ひとつのコミュニティを形づくっていたと思う。その輪郭はどこか繊細で、きつと何か一つの要素が欠け落ちると成り立たず、東京という都市空間の中にしか存在できないもののようにも感じられた。

最後に「ラボは建ったのか？」という問いに戻りたい。最初の時点では、「ラボチームの立ち上げ」と「ラボを建てること」はとても近いニュアンスで想像されていた。もし、先述のコミュニティがラボチームとしたら、ラボは建ったとも言えるのかもしれない。当初の目的や目論見はひとまず置いておいて、すでにラボが建ったとしたならば、それは建ち続けるのか。次の問いはそこにあるだろう。仮設的な場だからこそ安心しておしゃべりを続けられたような気もする一方で、でも何かひとつ踏む込むことの面白さと戸惑いを知った私たちがいる。

すこし変わってしまった身体を抱えながら、これからは東京でどう生き抜くのか。それを考える時にはきつと、ラボチームの面々の顔や、あの時したおしゃべりたちが浮かんでくるのだと思う。

# Tokyo Art Research Lab | 思考と技術と対話の学校 スタディ4 部屋しかないところからラボを建てる ラボ通信 報告号

こんにちは、ラボ通信です。  
このペーパーは、アートプロジェクトを担う全ての人々に開かれ、共につくりあげる学びのプログラム「思考と技術と対話の学校」のひとつ、「スタディ4 部屋しかないところからラボを建てる」の動向や参加者の関心などを伝える媒体です。  
毎月の定例活動の様子や、各参加者がどのような調査を行なっているかなど、その時々々のラボの姿をこの紙面に反映してきましたが、今号は報告会に際して、これまでの活動を振り返ってみたい。



## スタディ4 「部屋しかないところからラボを建てる」ナビゲーターメッセージ（一般社団法人NOOK）

ひとつの部屋（ROOM302）を拠点に、ラボチームの立ち上げを試みます。

「いま」東京で、メンバーそれぞれの関心を持ち寄り、一斉に調べ、徹底的に共有し、可視化するラボです。部屋に集い、話し合う。部屋を出て、身体を通してリサーチしたことを、また部屋に持ち込み、メンバーとの共有を繰り返します。はじめは部屋しかありません。メンバー全員でラボの方法や機能づくりにも取り組みます。

リサーチは「ひとの話を聞く」という方法に重点を置いてみることにします。ある関心事を知ろうとするとき、まずは本や資料に当たり、インターネットの検索から始めることも多いでしょう。しかし、一歩外へ出て、ひとに話を聞いてみると、自分の予想とは違う言葉や反応が返ってくる場合があります。今までの経験では受け止めきれないこともありません。そういった戸惑いを引き受け、身体を通して情報へ触れる方法、それをだれかと共有することについて繰り返し議論しながら進めていきます。

いま知りたいことを、より立体的に知るための技術「を、メンバーがそれぞれに開発し、実践していくことを目指します。そして、このラボから、長い時間をかけた新たな表現やプロジェクトが生まれ、いくことを期待します。

- 〔ナビゲーター〕一般社団法人NOOK（のおく）
- 瀬尾夏美（アーティスト）、小森はるか（映像作家）、磯崎未菜（アーティスト）
- 〔ファシリテーター〕小屋竜平
- 〔記録・編集〕高橋創一（編集者、ライター、校正者）
- 〔スタディマネージャー〕佐藤李青（アーツカウンシル東京プログラムオフィサー）

## かたつむりの座標と軌跡——スタディ4の来し方

スタディ4では、月に一度定例活動日を設け、定期的に顔を合わせてスタディの指針を話し合いながら定めてきました。ここでは、約半年間におよぶスタディ4の軌跡をご紹介します。

**第1回** …… 9月23日(日)、24日(月・祝)の2日間、アートセンター「3331 Arts Chiyoda」3階にある、アーツカウンシル東京のレクチャールーム+アーカイブセンター「ROOM302」にて、当スタディ参加者の初顔合わせが行われました。  
簡単な自己紹介に続いて、参加者各自の関心共有が始まると、一人あたり15分の予定を大幅にオーバーし、なぜこのスタディに参加しようと思ったのか、何を自身の問題意識としているのか、来年2月までの半年間で何を深めたいのか、熱を帯びた言葉が飛び交いました。その後はスタディナビゲーターである小森はるか+瀬尾夏美の共同制作の方法についての説明や、これから半年間の進行についてなど、話は次々と展開。2日目の終了後には、5つのスタディの合同会も設けられ、お互いに関心を共有して今後への蓄えとしていたようでした。



第2回 10月14日(日)が、第2回目の定例活動日。江東区の東京大空襲・戦災資料センターを訪れ、館長で作家の早乙女勝元さんのお話を聞き、午後はセンターの主任研究員で社会学者、キュレーターの本山唯人さんを交えて対話の場をひらきました。

スタディ参加者はこの日に備え、事前にセンターを訪れ、早乙女さんの著書『東京大空襲—昭和20年3月10日の記録』(岩波新書、1971)と、可能であればもう一冊早乙女さんの著作を読み、その感想をまとめるという課題に取り組みました。

山本さんによるセンターの解説を経て、2時間ほどに及んだ早乙女さんのお話と質疑応答では60年以上の作家人生、50年ほどの聞き書き活動によって鍛えられてきた厚みのある言葉、行動をともなった思想の強固さを私たちに教えていただきました。

午後は山本さんを囲み、体験者が非体験者に直接話を伝えられなくなったときの「継承」の問題や、今後のセンターの資料展示のあり方などについてお話がありました。さらに参加者それぞれの感想を語りあい、「話を聞くことへの責任」「時間とともに変容していく語り」「追体験とはなにか」などのキーワードを交えつつ、早乙女さんやセンターから受け取ったものを咀嚼して血肉にするための言語化に懸命に取り組んでいました。

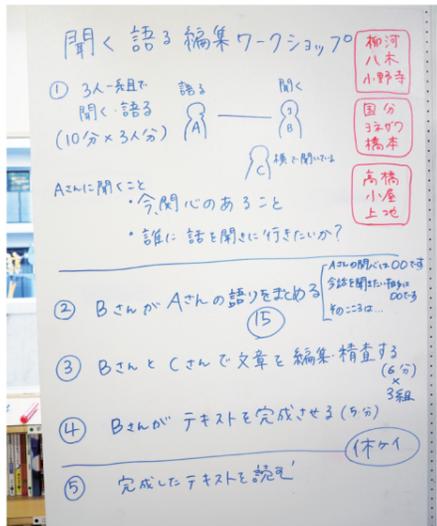


第3回 第3回定例活動日は11月11日(日)。午前中は瀬尾の企画により、江東区の水辺を巡りながら、戦災の跡を知る町歩きを開催。「江東区の水辺に親しむ会」のメンバーでいらっしやる奈良朋彦さんを案内役にお迎えし、ラボメイトも参加しながら午前9時から昼過ぎまで、町歩きを楽しんできた様子でした。一方、橋本さんは大田区の聖フランシスコ子供寮を会場にした「虐待と共に生きるということ」という講演会への参加を呼びかけ、そちらのほうへ参加したラボメイトチームもあり、各々の午前中の報告からまずはスタートしました。

その後、「まずは年内に一回は誰かの話を聞きに行く」という目標を再確認。そのためには、「誰に」話を聞きにいけばいいのかを決める必要があり、再度ラボメイトの関心がどの方向に向かっているのかを聞いてみることに。そこで「聞く、語る、編集 ワークショップ」と名付けられたワークショップが行われました。

これは三人一組で行われるもので、Aさんが自分の現在の関心について話し、Bさんはその聞き手として話を聞き出します。もうひとりのCさんはサブの聞き手としてそこにいます。10分で区切り、3人が各々立場を変えて順繰りに続けていきます。ひととおり話を聞き終わったら、メインの聞き手であるBさんがAさんの話を文章にします。その後、サブの聞き手であるCさんとその内容について話し合い、再度Bさんが一人で文章を成型して完成、という流れ(右図参照)。

このワークショップを受けて、次回の定期活動日までにできるだけ話を聞きに行ってみてほしい、という提案がされました。



◀ワークショップの仕組み

### ヨネザワエリカ

記憶や思考の外部化のような位置づけです。東京を考えると、1人では手一杯になってしまう。これはラボが立ち上がるきっかけとなったNOOKの皆さんの問題意識と共通する問題意識でした。時間と場所を長時間共有して話し聞くことで得られた知見や、安心感(安心して話すことができる共同体がある、という)は貴重でした。ただ、それよりも何よりも、スタディ4に参加した私の心の湖に石を投げ入れたのは東京大空襲の語り部である早乙女勝元さんのお話を聞く機会でした。身近に起こっていた空襲という事実から戦争を考える。以降、墨田区の豊かな文化的状況の語り口に悩むようになりました。もう軽々しく「空襲で焼け残った地域は人と人の距離が近く」であったり「明治期の状態が残る町並みが抱える防災における課題が地域のつながりを」と口にできません。墨田区における空襲の事実のように、何かの原因を語る時に必要とされるものを語りを含めると現在を変えてしまうかもしれない。この事実を前提に置いてどのように語るか。「かたつむり」が続くのなら話す事や聞く事(聞いてしまう事)の複雑な影響について考えていければいいですね。



### 国分幹生

#### ・興味の違う人の話を聞ける場所

日々の生活だとやはり似た興味関心の人と話していることが多いので、ものの考え方とらえ方に日常では揺らぎが生じないのですが、あの場で話されることは実は僕にとっては非日常の問題意識が多かったりするので、行くたびに少し足場がぐらつくような感覚があって面白いです。

#### ・自分を見つめ直すきっかけになる場所

自分の思考の癖や人との関わり方について、気づかされるが多かったです。「人から何かを勧められたときに一度必ず断る傾向がある」と言われたり。普段はしない人の内面に話をしてるので、図らずも配慮の足りない表現を使ってしまったり。これもやはり普段関わる相手との間では問題のないコミュニケーションの取り方なだけで、そうではない人と話すときにはうまくいかないことがわかるということかなとも思います。

### 橋本佐枝子

私の原家族は皆話好きで、知識や語彙を豊富に使って意見を表明するのがうまかった。最年少で自分に自信のない私にとって「話すこと」はとても怖いことだったので、常に黙って聞き役に徹していた。「聞くこと」は「話すこと」を回避できる、安全な殻だった。

その後、私は臨床心理士になり人の話を聞くことを仕事としている。今回東京かたつむりに参加したのは「聞くこと」をもう一度違う角度から考えてみたかったからだ。しかし、かたつむりがスタートすると、誰かに話を聞くのが億劫になる自分がいた。話を聞くのはとてもエネルギーがいる。仕事で聞いた話は死ぬまで抱え続けなければならないと話を聞くのはしんどい。まずは、これではかたつむりから外れてしまう。正直そう思った。この億劫さには何かある、それこそ自分がかたつむりから得られる何かだと信じた。

メンバーが実際に誰かに話を聞く段階に入り、私は一般的な情報を聞いてきたがメンバーの話を聞くと波乱万丈の人生や驚きの秘密が溢れ出てきて、なんとも興味深かった。しかし、後になって誰かの話を面白がって聞く自分が少し嫌だった。「話を聞くと面白い」というストーリーに乗せようとしている自分も嫌だった。たぶんそれは、これまで仕事で抱えてきたたくさん話の重さと、幼少期の「話すことは怖いこと」という重さを思い出したからだろう。かたつむりの場合は荒削りながら、そんな思いも一緒に抱えてくれる場になりそうな予感を感じた。

人の話を聞くということは、人とどのような関係を結ぶか、である。人と繋がる喜びと怖さ、それを「話す」「聞く」という行為ははっきりと体感させるものである。誰かと話すと、傷つく、傷つける、癒す、癒される、が互いに交差しながら二人の関係性が編み込まれていくのだ。

### 足立靖明

去年の春から秋にかけて、僕は、マウンティングについてずっと考えていて、簡単に言えばそれは、「いかに効率よく、インスタントに自分の優位性を示せるか対決」の蔓延る世の中について、であって、それってつまり、時間のかかる事や、複雑な事、手間のかかる事はとく忌避されがちな世界と言うか、コスバや効率、生産性になによりも重きが置かれ、ちょっとでも持ち時間のたくさん必要そうな話を切り出そうものなら、即座に退場を余儀なくされる感覚に、常に脅かされながら過ごさなければならない感じ、に対する違和からスタートしており、そこから自分なりにマウンターを分類・分析したり、マウンティング化する社会への対抗策を考えたり、それを日常でこそこそ試したりしていた中で、出会った場所がスタディ4であり、東京かたつむり、だった。

ここではどこまでもオープンに、ひたすら時間をかけながら、お互いがお互いの事を話し、それに耳を傾け、集団で思考する。

ゴールを先に設定し、最短距離で解を求めようとする手つきはどこにもなく、ほんの小さなミクロな気づきから、大状況に対する巨大で漠たる危機感にまで、思考の拡張を、無理なくずっと続けられる体力が、場の中にあり、時間としてとても豊かだった。

ここへ来ればとりあえずなんでも話せる、という感触が心地よく、とは言え馴れ合いや、過剰に問題にコミットし過ぎる向きでもなく、お互いがお互いに、来月もまた会いましょうと毎度サラリとさようならをする雰囲気も、たぶん僕がどこかでとても求めていたものだったように思う。コスバや効率しか考えられない世界はきっとおそらく貧しいし、数値に還元できない場と時間を作る大切さと、その頑張りが与えてくれる豊かさを、じっくり学べた貴重な半年だった。



## わたしにとっての 「かたつむり」

本スタディ参加者のみなさんに、このラボ=かたつむりに参加したことで見えたのはなにか、このかたつむりという場所はどのような意味を持っていたのか、振り返ってまとめていただきました。

### 柳河加奈子

本当に最初は「部屋」しかなかった。到達点も出来合いのシナリオも同調も強制もない。そんな何もない中、不思議な縁でつながったメンバーとともに何時間も話すことを繰り返し、見えない「何か」を探っていくことはとても豊かなことであった。合理主義的に手早く答えや結果ばかりを求めたがる「いま」「東京」で、そこからこぼれ落ちているものに気付けたことは「かたつむり」の歩みのおかげだと思う。

東京大空襲・戦災資料センターで館長の早乙女勝元氏や学芸員の山本唯人氏の話メンバーと一緒に聴き対話の場を持てたことは、自分の関心事の「戦争」と偶然重なっていたこともあり、私の財産となった。また、一見関係のない他人の関心事の中にこそ自分の関心事の一番のヒントが潜んでいることも多かった。関心が関心を生み、増殖する感覚をたっぷり味わう。

当たり前だが、「語り」は聞いてくれるひとがいて初めて成立する。「集う」場があり、みんなで「むかう」方向があり、「リサーチ」を発表できる場がないと、ひとりではなかなか行動は起こせない。わたしにとっての「かたつむり」はそれが可能なサードプレイスとなり、相手の反応を通して自分を知り、フィードバックを身体に定着させていくことができる実験的な場だった。

「かたつむり登らば 登れ富士の山」という山岡鉄舟の歌が好きだ。我が「かたつむり」も歩み続ける力を習得できたと思う。

### 八木まどか

私にとっての「かたつむり」は、世の中を見る解像度を格段に上げてくれた存在でした。

もちろん今まで話を聞けなかった人たちに聞けたし、チームのメンバーの話をたくさん聞けたおかげです。その一方で、私もかなりの量を聞いてもらいました。もともと私は話すのが得意ではなく、自分の話ばかりしていると申し訳なくなるし、考えがまとまるのに少し時間がかかるほうです。考えがまとまってシミュレーションまでしている話も、いざ相手を前にするとうまく口から出なかったり、言うタイミングを逃したりして、体の中に蓄積している話が結構あると長らく感じてきました。

かたつむりでも、最初はやはり様子を見すぎて迷子な状態がありましたが、次第に楽になり、気が付けばラボ以外の日常生活でも「よく話すようになった」と言われて驚きました。それは、ラボメンバーの聞く能力の高さだけでなく「チームの思考が自分の頭にも入ってくる」感覚を得たからだと思います。話を聞くことで立体的に他者の視点が入ってきました。なので、私自身の考えが高速に更新され、自分でも思ってもみなかった言葉が口をついてきたこともありました。

もう一つ得たのは、自分の聞き癖を知ったことです。1月のラボでそれぞれの聞き癖が話題になって自覚できました。最近気付いた私の癖は「感情移入しやすい」ということです。会社の先輩に話を聞き終わった後、デスクで泣きそうになってしまい結構「持っていかれた」感覚になって気付きました。これは決してプラスにはならないのかもしれませんが。聞いたことと適切な距離を取る必要はあると思います。しかし同時に「ちゃんともらってしまう自分でいたい」とも思います。出来事に慣れたくないし、忙しすぎて何にも感動できなかった時期もあったので、それに比べたら心が生きている証拠だと思っています。だから、どんと受け取れる体力をつけたいです。

東京に越してきて約1年半、あまり友人ができず休日ほとんど人と話さず過ごしていた私にとって、濃厚な聞き手に出会えた場所が「かたつむり」でした。

### オープンラボデイ 第1回

11月24日(土)には小屋さんをファシリテーターとして、相談、雑談などを自由に行うオープンラボデイが催されました。オープンラボデイは、なにかの目的を持って始まるのではなく、集まった人たちが互におしゃべりをするなかで、その日にやることを決めたり、決めずに過ごしたりする放課後タイム的なものです。この日は足立さん、李青さん、瀬尾さんが集まり、16時から22時くらいまで、あてどもなく関心のあること、相手の関心を受けて引き出された自分の興味などについて話しました。

### 第4回

12月9日(日)の第4回定例活動日では、これまでの流れを振り返りながら、改めてこのラボの仕組みや取り組みについて考えるところからスタートしました。

このラボの軸のひとつとして、メンバー同士でそれぞれが持つ関心を共有し、それについて思考するということが挙げられます。この点については、これまでの4カ月間を通して、視線や歩みを共にできてきたといえるでしょう。そこで、再度ラボの動き方として確認したいのは、「外にひらくこと」です。本スタディの趣旨文にもあるように、「いま」「東京」で、「ひとの話聞く」ことを実践し、そこで聞いたことや感じたことを、改めてこのラボの場に持ち帰る流れをつくりたい——瀬尾はまず冒頭で以上のようにメンバーに話しました。

これまで、2月24日(日)に行われる報告会に向けて、どのようにアウトプットしたらいいだろうか、という悩みが度々メンバーから聞かれましたが、これについても「必ずアウトプットをする必要はないです」と瀬尾。「話を聞きに行くことの動機、理由付けとしてアウトプットを考えることもできますが、その場合どういうアウトプットのメディアをつくるかということも含めて、このラボで考えたいです」と説明。このラボを口実にして、普段の生活圏とは違うチャンネルを持ち、話を聞いてほしいと強調しました。

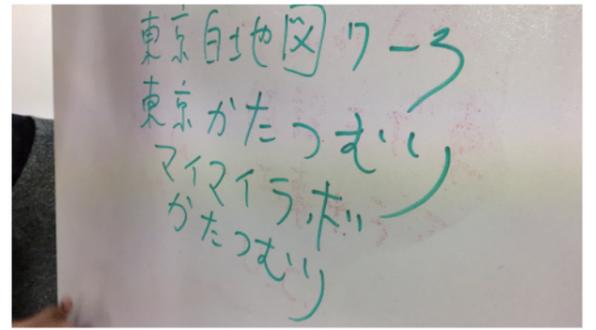
続けて、この1カ月のあいだにどのような話を聞いてきたか尋ね、ヨネザワさんが偶然出会った自分とは違う世界に生きている起業家と話したことを共有し、それにメンバーが応答をしていきました。

また今回の定例活動では、個人ワークとして、何か関心のあるテーマをひとつ決め、縦軸を過去と未来の時間軸、横軸を遠近の距離感として設定し、その図に思い描いたことを描き込み、解説の文章も添える、という試みを行いました。

休憩を挟んだ後半では PortB の田中沙季さんをゲストに迎えて、自身の生い立ちからなぜ現在 PortB でリサーチの仕事を行っているのか、これまでどのようなリサーチを行ってきたのか、これからの関心は何かまで、2時間ほどお話をうかがいました。多様な実践を聞き、メンバーからの質疑応答も熱を帯びたものとなり、打ち上げの中華料理店でも話ははずんでいたようでした。



..... ラボ名が「かたつむり」に決定したのは12月21日（金）のオープンラボデイでのこと。「最終的に「かたつむり」という名称が選ばれたのは、ラボのテーマである、人の話をききにくというところから、耳のなかの蝸牛の形が連想されたことや、「かたる、つどう、むかう、リサーチする」という「かたつむり」からできる言葉遊びが含みこまれているのも面白いのではないかということが、決め手の一つです。また、最初にラボ名を紹介した時にそれ自体が話のきっかけになるのでは、ということも「東京かたつむり」が採用された理由になっています。テーマに沿ったモチーフであると同時に、実際にその名称を使用する現場まで考えられたのは、よかったのではないかと思います。個人的には、這う感じや雌雄同体であることとかも、割と良いのではないか、ということを感じたりもしました」（小屋さんのメールより引用）



第5回 ..... 新年を迎え、1月は13日（日）が活動日。この日は、1カ月のあいだに聞いてきた話を持ち寄り、共有することと、2月の報告会に向けての話し合いの2つをメインに取り組みました。まず各自が聞いてきた話を報告し、後半はその各自の話をどのように聞かれたかをフィードバックするという流れで、自分が聞いた話をひらいていく試みを行いました。

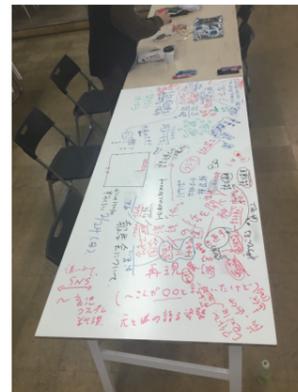
その後の話のなかでは、話を聞くときの態度として「聞き癖」があるといった指摘や、ラボのテーブルに話を載せるとき、段階を踏んでプレゼンテーションを行っていることの気づき、あるいは話題というものが一つの大きなトピックに紐付いている場合は抽象度の高い議論ができるけれども、一方プライベートな私性の強い話題については、どんなにおもしろくても消化をするための時間がある程度は必要といった感想が出てきました。

瀬尾からは、「人の話を聞くと“あたってしまう”ことがあるけれど、そのときのセーフティーネットとしてこのラボを意識して、使うというも手」「東京のような都市の場合、知らない人の話を聞きに行くことのハードルが高いと、この半年で実感したけれど、このラボを利用するようなかたちで”聞く““身体のパリエーションを持てればと思う」といった言葉がありました。

そして、2月の報告会で何をやるかについても議論されましたが、最終的な決定は2月の活動日に行う雰囲気。



..... 1月は27日（日）にもオープンラボデイが開催されました。「参加者は柳河さん、ヨネザワさん、李青さん、高橋さん、小屋の5名でした。いつものように、最初は最近の関心事についてなど話しながら、後半は、いつも使っているテーブル兼ホワイトボードを、今回は立てるのではなく、その周りを囲み、テーブルとしても使いながら、話してみました。報告会で具体的にどのようなことを見せるのか？ 聞いてきたことを語り直し、それに他のメンバーが自分の関心からさらに掘り下げていくプロセスを再現を見せるのか？ そのときにどのような空間の配置や構成にすればよいのか？ など、報告会についても話してみたり、とりとめのない話を聞くことと、その話を相手に話し直すときに現れる聞き癖についてや、二人で話を聞きそれを振り返るプロセスで出てきたことなど、柳河さんと八木さんが二人で聞いてきたことによって、一人ではなく二人で聞くという方法についても話しました」（小屋さんのメールより引用）



第6回 ..... 2月17日（日）が最後の定例活動日。この一ヶ月で聞いた話を共有した後、このラボには何かしらのもやもやを抱え、場を求めている人たちが参加者として集ってきており、その一人ひとりの「個」の問題や関心を抽象化すると現在の「東京像」が見えてくるのでは、という考えから、この日の参加者一人ひとりに瀬尾が話を聞くことに。それと同時に、翌週に迫った報告会の内容や、2月に一旦終わっても、その後もこのかたつむりというラボが活動ができるとしたらどのような形があり得るだろうかと議論を重ねました。

いつもはホワイトボードを立てて、それに視線が集まるような場をつくり、話をしてきたのですが、この日はテーブル自体をホワイトボードとすることで、視線を一箇所に集めるのではなく、お互いに視線を交わしながら目の前でメモを取ることができるようになり、より一人ひとりの距離が近くなった印象を受けました。

報告会は、小屋さんによるこれまでのラボの振り返り、ラボのメンバー紹介、そのメンバー紹介をどのように聞いたかを自由に話す時間、この三つで構成することに。この日、瀬尾が聞いたラボのメンバーの話をもとに、メンバー紹介のテキストを構成するということが決まりました。

また次年度以降の活動のありようとして、NOOKが仙台のTRACで行った展示「とある窓」のように、対象とするものを一つ決めて、皆が同じフォーマットでテキストや写真などを発表できるような取り組みを半年ほどかけて行ってはどうか、と展開。一度そのような型を決めて活動したうえで、自由に各々活動してもよいのでは、という話になりました。

